

資 料

## 社会人のスポーツに対する態度とスポーツ 活動との関係について

平田 久雄      青山 昌二      木村 國次\*

東京大学教養学部

\* 共立女子大学

## The Relationship between Attitude Toward Sport and Sports Behavior in Adults

Hisao Hirata, Shoji Aoyama and Kunitsugu Kimura\*

Department of Sports, College of Arts and Science, The University of Tokyo

\* Kyoritsu Women's University

### Abstract

In this study, based on the results of a questionnaire administered to 713 adults, 337 males and 376 females, who lived in a local city of the northern part of Japan, the relationship between the attitude toward sport and the behavior in sports was examined among adults.

It was recognized that favorable attitude toward sports in males tended to increase frequency in their sports participation but that the least relationship was found between those two factors in females. It was observed that females had more difficulties and obstacles in their participation in sports according to their value concepts and beliefs than males did.

### はじめに

一般に、態度は行動の準備状態を意味し、ある対象に対する肯定的-否定的(あるいは好意的-非好意的)態度が、個人の反応や行動に影響を与える一要因であることは、改めて言うまでもない。スポーツ科学の分野でも、多くの研究がスポーツ参加とパーソナリティ、ないしはスポーツに対する態度との間に、一定の関連があることで、ほぼ一致している。<sup>1)2)3)</sup>

しかし、われわれの報告した“社会人のスポーツ活動に作用する要因の分析”では、両者の結びつきは、予想された程明瞭でなく、スポーツ活動への影響力は、「学校時代のスポーツ種目を現在でもよくやっているかどうか」や「健康のための心がけ・努力の有無」などの方が、より大きいことが示唆された<sup>4)</sup>。そこで、同じ資料について、態度の側から分析し直して、その実態を改めて明らかにして置きたい。

### 研究目的

社会人のスポーツ活動に作用する要因を明らかにする目的で、東北の一地方都市在住の成人を対象として実施した質問紙法による調査結果から、スポーツに対する態度とスポーツ活動との関係を分析し、両者の係わり方の特性を考察することである。

### 方 法

方法は、体育学紀要第23号に詳しいので、<sup>4)</sup>ここでは概略にとどめ、「スポーツに対する態度」についてのみ詳述する。

1. 対象：岩手県遠野市在住の成人で、学生を除く、男子337人、女子376人、合計713人
2. 時期：昭和62年10月
3. 調査方法：質問紙調査法
4. 調査内容：性別、年齢、学歴、職業、運動クラブ所属、部活経験、健康状態、体力の自己評価、技能の自己評価、健康指向度、学校時代のスポーツ種目、スポーツをする目的、スポーツ実施頻度、スポーツに対する態度。

「スポーツに対する態度」を調べるための設問、

意見項目および選択肢は、次の通りである。

〔設問〕 運動やスポーツは、人間にとってどんな意味をもっているでしょうか。次の意見について、あなたの日頃のお考えと一致する程度によって、5段階の答えのいずれかの数字を○で囲んでください。

〔意見項目〕

(ア) スポーツは、人生における大きな楽しみの一つである。

(イ) スポーツをするくらいなら、他にやるべきことがたくさんある。

(ウ) スポーツは仕事の能率を高める。

(エ) スポーツはひまな人の時間つぶしである。

(オ) スポーツは人の気持ちを明るくする。

(カ) スポーツは粗暴な人間をつくる。

〔選択肢〕

大いに		どちらとも		大いに
賛成	賛成	いえない	反対	反対
1	2	3	4	5

結果の処理に当って、専門項目全体を一種の尺度として扱い、得点を求めた。<sup>5)</sup> 得点化の手続きは、(ア)、(ウ)、(オ)の肯定的意見は、大いに賛成の5点から、大いに反対の1点まで、順に1点きざみで与え、他の三つの否定的意見には、逆順に点を与える。個人の得点を合計して6で割り、平均評定値を求める。従って、中立の立場は3点で、3点より大きければ肯定的(最高点は5点)、小さければ否定的(最低点は1点)となる。ただし、実際に得られた平均評定値をみると、3点を下廻る例はまれで、大部分が3点を越えており、従って肯定的-否定的の区別は相対的な値の上でのこととなる。

### 結果と考察

「スポーツに対する態度」と比較的高い相関関係を示した幾つかの調査項目について、各反応カテゴリーを選択した集団による「態度」得点の平均と標準偏差を調べたのが、表1である。「スポーツ実施頻度」(男R = .270, 女R = .025), 「技能の自己評価」(男 .314, 女 .136), 「部活経験」(男 .251, 女 .071)は、男子で関連の

表1 「スポーツに対する態度」尺度の平均得点と標準偏差

	男			女		
	N	M	SD	N	M	SD
〔スポーツ実施頻度〕						
1. 週に3日以上	38	4.27	0.54	27	3.96	0.48
2. 週に1~2日	59	4.14	0.51	48	3.95	0.48
3. 月に1~3日	76	4.05	0.47	52	3.99	0.52
4. それ以下	102	4.03	0.47	111	4.01	0.44
5. 全くしなかった	46	3.69	0.49	87	3.91	0.51
〔技能の自己評価〕						
1. 大いに得意である	51	4.27	0.60	16	4.14	0.55
2. どちらかといえば得意な方である	148	4.12	0.48	148	4.02	0.47
3. あまり得意ではない	115	3.87	0.42	71	3.92	0.48
4. 苦手である	17	3.72	0.64	38	3.85	0.59
〔部活経験〕						
1. なし	23	3.87	0.49	147	3.91	0.53
2. 中学	73	4.09	0.55	113	3.95	0.52
3. 高校	124	4.13	0.47	103	4.03	0.41
4. 大学	16	4.30	0.55	15	4.04	0.42
〔体力の自己評価〕						
1. 同年齢の人より、体力の衰え方が少ない	114	4.10	0.53	88	4.08	0.49
2. 衰えは感ずるが、年齢相応で仕方がない	203	4.01	0.47	257	3.94	0.46
3. 同年齢の人より、衰え方が激し過ぎる	16	3.86	0.80	24	3.69	0.64
計	336	4.03	0.52	378	3.96	0.49

高かった上位3項目であり、「体力の自己評価」(男.110, 女.179)は、女子の第1位であった。

相関係数の値の違いから考えても当然なことであるが、男子の方の平均値はいずれの項目についても肯定から否定への傾斜が明らかであるが、女子では「体力の自己評価」と「技能の自己評価」を除くと、一定していないことがわかる。

「態度」と「スポーツ実施頻度」との関係、より端的に示すために図にすると、図1の通りである。ここでも女子の関連のなさは歴然としており、それに対して、男子では一定の傾向が明らかに認められる。即ち、スポーツ実施頻度の高い集団程、スポーツに対して肯定的態度をもつ者の比率が高く、逆に、実施することが少ない集団は、否

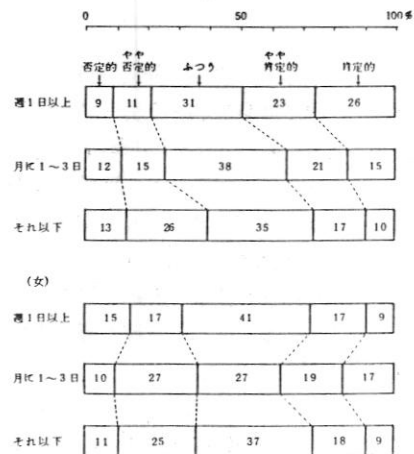


図1. 「スポーツに対する態度」と「スポーツ実施頻度」との関係

定的態度をもつ者の比率が高いことがわかる。

次に、「態度」得点を目的変量とし、その他の調査項目を説明変量として重回帰分析を行い、重相関係数、決定係数、標準偏回帰係数を求めると、表2、表3の通りであった。

表2 男子による重回帰分析

N = 337

目的変量 スポーツに対する態度	重相関係数 .430** 決定係数 .185
説明変量	標準偏 単相関 回帰係数 係数
技能の自己評価	.184** .314
健康指向度	.123** .228
部活経験	.151** .251
スポーツ実施頻度	.122** .270
職業	.067 .064
学校時代のスポーツ種目	.082 .249
年齢	-.078 -.035
クラブ所属	.027 .175
健康状態	-.024 .029
学歴	-.019 -.108
スポーツをする目的	.005 .079
体力の自己評価	.001 .110

\*\* P < .01

これらの重相関係数を、分散分析によって求めたF値について検定すると、男子では6.103、女子では2.867であって、それぞれ1%水準で有意であった。また、説明変量毎の標準偏回帰係数の検定結果では、男子では「技能の自己評価」から「スポーツ実施頻度」までの4項目が、女子では「体力の自己評価」から「年齢」までの3項目が、1%水準で有意となり、その他の変量はすべて有意ではなかった。

女子の重相関係数は有意ではあったが、その値は決して高いとは言えず、従って、これらの変量が「スポーツに対する態度」を説明しているとは

は言い切れないが、特に、ここでも「スポーツ実施頻度」との係わりが、極めて薄いことがわかる。

表3 女子による重回帰分析

N = 376

目的変量 スポーツに対する態度	重相関係数 .293** 決定係数 .086
説明変量	標準偏 単相関 回帰係数 係数
体力の自己評価	.129** .179
クラブ所属	.110** .134
年齢	-.158** -.104
学歴	-.066 -.102
技能の自己評価	.070 .136
部活経験	.070 .071
学校時代のスポーツ種目	-.060 -.015
健康状態	.044 .055
健康指向度	.056 .128
スポーツ実施頻度	-.034 .025
職業	.021 .021
スポーツをする目的	.019 .018

\*\* P < .01

しかし、男子については、有意であった説明変量の中に、「技能の自己評価-スポーツを得意としているかどうか」、「健康指向度」、「スポーツ関係の部活経験」等経験的にも納得できる変量と共に、「スポーツ実施頻度」があげられ、女子とは明らかな対比を示している。

男子では、スポーツに対する肯定的態度、即ち、好意的認識や価値判断は、スポーツ活動への動機として働きやすいのに対して、女子の場合は、スポーツがよいことはわかっている、必ずしも思い通りには実行に移せない条件や障害が多いと考えられないであろうか。

本調査に含まれていた付加的質問項目に、「スポーツをする場合、この条件さえ改善されれば、もっと十分にやれるのだがと思うことを一つだけあげて下さい」というのがあり、そこでは「ひまがあれば」というのが第1位にあげられるのは、

男女共通だが、その他に、「スポーツが得意であればよい」（男3.7%に対して、女11.1%）、「周囲の人の理解がえられればよい」（男0.5%、女3.2%）、「仕事の疲労が軽ければよい」（男2.6%、女6.8%）など、本人の意志ではどうにかなりにくい障害の訴えが、圧倒的に女子に多かったことは、以上の推理の裏づけの一端を示すものであろう。<sup>6)</sup>

#### まとめ

東北の一地方都市在住の成人を対象として行なった質問紙法による調査結果から、スポーツに対する態度とスポーツ活動との関係について検討した。両者の間の関係は、男女によって対比的な違いを示した。男子では、スポーツに対する肯定的態度が、現実にはスポーツを実施する頻度を増す傾向が認められたが、女子では、両者の結びつきが極めて希薄であった。その原因として、女子の場合は、自己の価値観や信念に従って、直ちに実行に移せない条件や障害が、男子の場合より多いことが推察された。<sup>6)</sup>

#### 注と文献

- 1) 橋本公雄「スポーツ行動とパーソナリティ」徳永幹雄他共著「スポーツ行動の予測と診断」不昧堂出版、120 - 122, 1985.
- 2) 丹羽 昭他「スポーツ参加婦人のパーソナリティの特徴」スポーツ心理学研究、11: 19 - 28, 1984.
- 3) 種村紀代子他「スポーツ教室参加児童のパーソナリティの検討」体育学研究、25 - 1: 1 - 11, 1980.
- 4) 平田久雄、青山昌二、菊池裕子「社会人のスポーツ活動に作用する要因の分析」体育学紀要、23: 39 - 44, 1989.
- 5) 本研究で用いた6項目は、元来10項目から成る態度尺度法として、筆者らによって作られたものの中から、重回帰分析を用いて、比較的重要な意見項目を除き、残されたものであって、単なる思いつきや偶然の結果ではない。
- 6) 東京大学社会体育研究会「遠野市民のスポーツ・リクリエーション活動に関する調査報告書」1~96, 1988.